The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「書くことと、考えること、行動すること」あるいは対話と社会運動のためのキリスト教的・フェミニズム的論述
Author(s)	栗田, 隆子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 8-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第３回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「書くことと、考えること、行動すること」

「書くことと、考えること、行動すること」あるいは対話と社会運動のためのキリスト教的・フェミニズム的論述（注 1）

栗田　隆子

はじめに　言葉との関わり―あるいは２０年のプロセス

私は現在肩書きとして「文筆業」「文筆家」と名乗っている。あるいは時々「在野の哲学者」と名乗る時もある。かつて生業はもろもろの職種の「非正規労働者」あり、それを肩書きとして名乗っていたのだが、その労働をコロナ禍で失ったからだ。非正規の仕事を失った際、貯金もほとんどない私は生活保護を受給するに至りいよいよ「無職」という肩書きになったなと思った。だが、拙著『ぼそぼそ声のフェミニズム』がすでに販売されていること、また 20 年近く続けてきたことが結局（それで生計を立てているかどうかとは別に）「ものを書く」（そして原稿料を得る）ことであり、また私の文章を望む人が一定数存在していることから、2020 年 4 月から「文筆業」「文筆家」と名乗ることにして、今に至る。

私自身、「書く言葉」に支えられ、また文字通り言葉を書く続けながら、他方で「書く言葉」に対して疑いを持ち、その力あるいは特権に警戒し続けてきた。それゆえ非正規労働で生計を立てていたときは、その特権を無闇に行使しない自戒の意味を込めて、非正規労働者の肩書きを使い続けてきた。また労働問題に関わる中で、その立場からの発言であることを意識するためでもあった。

2002 年大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻臨床哲学研究室の博士課程を文字通り中退し（単位取得中退ではない）、当初修道院に入ろうとしたが叶わず、「氷河期」と呼ばれた労働市場に飛び込むことになった。そして独身の「女性」がはたらくこと、さらにいわゆる正社員や専門職と呼ばれる職種・ジャンルではない仕事で生きる現状について発言をしてきた。しかもそれほど身体も強くなく、気力もないという前提付きで。なぜならそのような「女性」は、労働問題について語る文章ではもちろんのこと、小説や、何気ないエッセイなど、ほとんどどこにも存在していなかったからだ（注 2）。決して少なくない人数であるはずの私を含んだそんな「女性」が「ここにいる」ということ、ただそのことを伝えるために、15 年ほど言葉を発し続けた。

そのような私の言動は、「労働現場からの発言」とか、「当事者の貴重な発言」ということで受け入れられた。

しかし、いや、それゆえにこそ私の言葉とそれに伴う行動は一つの哲学であり、また証

言でもあると考えてきたし、今もそう考えている。

私は大学院を辞めたし、アカデミズムの哲学研究者の道も捨てたが、「哲学」そのものを捨てたつもりはない。少なくとも私が「哲学」と思ってきた「哲学」は。

ただし、私はかっこいい「言葉」、ちょっと気の利いた「言葉」、あるいはこれぞ哲学・学問として認められるため（だけ？）の「言葉」には、非常に抵抗を覚えていた。ましてや自分がそれを書かねばならないとなると、抵抗感は倍増した。大学の中だけで、というよりアカデミックの世界の中だけでの評価が優先される業界で完結する言葉は書きたくなかった。その思いは大学院内にいた頃から強かったと思う。市民メディアにささやかながら寄稿したこともある（注 3）。また大学が発行する紀要等（注 4）以外に販売できる同人誌をつくろうともした。

さらに大学院を中退する直前、ノルウェーのオスロで行われた「哲学プラクティス学会」に参加する機会を得た。当時の私はそのヨーロッパの人たちの中に質量のある言葉を見出すというより、むしろ私がこの日本で、「世間」とか「社会」とかいう場所において、大学関係の肩書きを一切捨ててどっぷり思考することあるいは何か礎（いしずえ）になる言葉を生み出すことが必要と思えてならなかった。しかもカッコいい（とみなされがちな）ヨーロッパより、洗練されていない日本のただなかで、「社会」を、そしてこの「私」を変えたかった。当初はカトリックの女子修道院に入ろうとしたが、入会は叶わなかった（注 5）。私は社会の中心でありながら周縁の労働者「非正規労働者」となった。しかし今ふりかえれば今のこの私のありようこそ、ほんとうの望みに近かったかもしれない。重みのある「言葉」、質量を持った「言葉」、その言葉を聞いたなら何がしかの行動が生まれてしまう言葉、自分を、他人を、あるいは社会を動かす「言葉」とは何かを考え、できればそのような言葉を生み出したかった身としては。

まず人や社会を動かす「言葉」はざっくり分ければ２種類あるだろう。

一つはいわゆる「国家という暴力装置」のもとの言葉――「法律」といった一種の権力の元にある言葉である。今の社会のほとんどの領域はこのような言葉の力で動いている。例えばマタイによる福音書（注 6）にはこう書かれている。

> 一人の百人隊長が近寄り、懇願して、「主よ、私の子が麻痺を起こし、家で倒れてひどく苦しんでいます。」と言った。そこでイエスは「私が行って癒してあげよう」と言われた。すると百人隊長は応えた「主よ、私はあなたを我が家にお迎えできるような者ではありません。ただ、お言葉をください。そうすれば、私の子は癒されます。私も権威の下にある人間ですが、私の下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また僕に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」イエスはこれを聞いて驚き、付いて来た人々に言われた。「よく言っておく。イスラエルの中でさえ、これほどの信仰は見たことがない。」
>
> （マタイによる福音書 5.5-10）

この箇所では権力の言葉がまず描かれる。ローマ帝国の下で兵隊が帝国の望むまま配置されるように、言葉が行動となる。

他方でイエスが子どもの病を治すこともまた、言葉が人を動かし病を癒やす。しかしこれはローマ帝国による力とは違うものだ。同じであれば「主よ、私はあなたを我が家にお迎えできるような者ではありません。」と百人隊長が語る必要はない。しかし、イエスの言葉は、原理は違えども言葉がそのまま行動となり人を動かす。そのことを自分の職務を通してアナロジカルに理解し、信じたこの百人隊長をイエスは称賛している。

いわゆる国家権力や資本による権力の「力」以外の言葉の力、言葉が行動となりうる力を持つ言葉とは何か、そもそもそのようなものが存在するのか。

あくまで私の場合ではあるが、大学という場所ではそのような質量をともなう言葉に触れ、あるいはそのような言葉とともに生き、あるいはそのような言葉を生み出すことは難しいと感じた。その後は思いもかけないことの連続だったが、それでもその選択をいまだに後悔したことはない。

そうして私なりの「書くこと・考えること・行動すること」を大学院中退後の20年近くの間、模索し続けてきた。とりわけ私は女性の賃労働を含む「しごと」という領域、さらに「しごと」であるのに「しごと」とみなされない「生活」領域での矛盾について女性独身非正規労働者の立場から取り組んできた。思考や行動については拙著『ぼそぼそ声のフェミニズム』に書かれているが、この論考ではさらに、その私の思考や行動を支えるもう一つの側面「キリスト教」あるいは「信仰」という要素についても論じていきたい。そしてその「キリスト教」、あるいは「信仰」を語るにあたり、最終的にはキリスト教の洗礼を受けたわけではないが、工場労働経験以後キリスト教、とりわけカトリシズムに近付き哲学を続けた（そして私が修士論文で取り上げた）シモーヌ・ヴェイユの言葉と行動をも参照していくこととする。

はじめに【注】

（注 1） この論考のサブタイトルはキルケゴールの『死に至る病』のサブタイトル、「教化と覚醒のための『キリスト教的・心理学的論述』」のもじりであるが、2021 年 2 月 10 日の臨床哲学フォーラムでの発表当初は、「対話と社会運動のためのキリスト教的・フェミニズム的心理学的論述」としていた。

（注 2） 戦中に男性が戦死したことにより、独身の女性が一定数実際は戦後存在していたが、その彼女たちに焦点を当てられたことは少ない。この人たちに関しては塩沢美代子・島田とみ子著『ひとり暮らしの戦後史 戦中世代の婦人たち』（岩波新書 1975 年）に詳しい。

（注 3） Ex.メールマガジン『カルチャー・レヴュー』 11 号（2000/06/01 発行）「セクシュアリティ・ジェンダーについての語り口の模索―『私で語る/私を語る』その意味と無意

味―」（栗田隆子）発行所：るな工房/Chat noir Cafe′ 発行人：山本繁樹。またそのほか有志で『Oui-da』（当時存在していたアルバイト求人誌をもじってつけた）というエッセイを集めた同人誌作成。

（注 4）1999–2002 年当時は臨床哲学研究室では『臨床哲学』そして『臨床哲学のメチエ』の 2 冊が刊行されていた。私はそれ以外に部外に販売できるような冊子を刊行したいと関係者に伝えたところ一部から強い反対を受けた。それ以降、（注 3）にあるような外の媒体に書く意思が強くなった。現在各地で行われる「文学フリマ」というイベントがあるが、大学の文芸部等以外にも有志による哲学や現代思想等の「同人誌」が並び、隔世の感がある。

（注 5）この修道院をめぐる経緯については『福音と世界』2021 年 6 月号（新教出版社）参照。

（注 6）百人隊長とはローマ帝国に仕える役職であり、イエスとは植民地支配者側-非支配者側の関係となる。「私はあなたを我が家にお迎えできるようなではありません」はこの政治的な背景をも含んで読むべきだろう。今後聖書は全て 2018 年版日本聖書協会訳のものとする。

第一章　「不幸」という状態、あるいは個人と社会の結節点について

これから語る私の話は、私個人の経験の話でありながら、そこに哲学やキリスト教、フェミニズムの主張、それらの視座から見た社会問題のあれこれがマーブル模様のように混ざりあっている。キルケゴールの『死に至る病』の序言ではないが、「この論述は、エッセイにしてはあまりにも詳述していて、エッセイというわけではなさそうだが、かといって厳密に学問的であるにはあまりにも「個」にこだわりすぎる」（注 1）とでもいうべきか。

しかし社会問題は統計や、政府発表の白書の中で明らかになるものだけでない。私個人の経験と分かち難く結びついているところから明らかになることもある。あるいは社会統計的なものも個人の問題と織り交ぜて語ることで初めて、この論考のタイトルでもある、「書くことと、考えること、行動すること」の結びつきがより明確になる場合もある。しかし、その前に言葉があらわれる前の話をしたい。「言葉がない」状態をそれでもなんとか言葉で語ることによって、権力が推し進める事柄、あるいは既存の事柄をさらに宣伝、推進するための言葉ではないことを表したいためだ。

しかも客観的・科学的な描写というより、キリスト教やフェミニズムと私の関係を語るなかから、「書くことと、考えること、行動すること」について語りたい。そしてその関係の中に信仰や、言葉を具現化させていくものとしての「社会運動」をもテーマとする。というのも私にとっての信仰と社会運動の結節点はヴェイユが「不幸」と呼ぶ状態について向き合い、無視しないことであるからだ。私の社会的／心理的／身体的／霊的な領域を横断する問題としての「不幸」について私は大学院の頃からずっと考え続けている。それ

ではヴェイユの語る「不幸」とは何か。

> 不幸は生命が根こぎにされることであり、多少とも軽蔑された死に等しいものであり、肉体の苦痛に触れるか、直接それを恐れるかによって、どうしても魂に現存するものとなる。肉体の苦痛が全然なければ、魂の不幸はない。
>
> 人間はこのひどい状態で二十年も、五十年も生きることができる。
>
> 半分つぶされた虫のように、地面をのたうち回るような打撃をうけた人々には、**自分の身に起こったことを表現する言葉がない。**彼らが出会う人々は、多くの苦しみを舐めていても、本来の意味の不幸に触れたことがなければ、それがどう言うものなのか全然分からない。
>
> （シモーヌ・ヴェイユ『神への愛と不幸』【太字は引用者】）（注 2）

例えば「社会的な問題」としても、個人の苦しみとしても無視されてきた多くの問題がある。例えば独身の非正規女性は存在しないこととされていた。女性たちが行う膨大な仕事は「非正規」という言葉で評価の枠外にされた。女性たちが多く就くケア的な仕事の賃金は非常に低く据えられることが多い。失業してあるいは何度面接しても仕事にありつけず、存在ごと否定されるような事態になっても「自分の努力が足りない」と責め立てられる状況。報道されてないことも含めて言葉を無視され、あるいは嘲笑され、放置される存在がある。

上記の「言葉がない」存在は社会からの隔絶というより、孤立させられるかたちで社会の中でも磔にされている存在だ。

> ある生命を根こぎにした出来事が、直接的にか間接的にか、社会的、心理的、肉体的にその生命のすべての部分に達していなければ、本当の不幸はない。**社会的因子は本質的なものだ。**何かの形で社会的な堕落かその心配がなければ、本当の不幸はない。
>
> （同上引用、【太字は引用者】）

このように社会的な因子が絶対でありながらも、単純に社会的な問題として語ることができないのがこの「不幸」の状態だ。ヴェイユは語る。

> 不幸とすべての悲しみとの間には、水が沸騰する温度のように、連続と同時に境界がある。境界の向こうに不幸があって、こちらがわにはない。この境界は純粋に客観的なものではない。**各種の個人的な因子が入ってくる。同じ出来事がある人を不幸に追いやるけれども、他の人にはそうでないことがある。**

（同上引用、太字は引用者）

1998 年『臨床哲学のメチエ』vol.1 で「不登校を語ること――不登校における＜私＞性」というタイトルで私が発表したように、不登校と言っても、その重み、意味合い、経験の位置付けはさまざまだ。私にとっては「不登校」とは体が動かなくなり、自らの心身のコントロールが効かず、それを表現する言葉がないという「不幸」の経験だった、と後から振り返って思う。そして自己をコントロールしてなんとか学校へ行こうとする努力を一旦「放棄」して生きることが私の信仰の一歩であった。

しかし、これはたまたま私にとって「不登校」が「不幸」の経験だっただけで、いろいろな契機が人にはあるだろう。当然「不登校」という概念をヴェイユの語る「不幸」に結びつけられるかは個人差がある問題ともいえる。

このように社会問題とも個人の問題とも一見捉え難い状況こそが「不幸」というヴェイユが突きつけたものの本質に思えて、私が惹きつけられる理由でもあった。

私はその後、非正規労働者になり、あるいはうつ病を患って精神障害者にもなったが、これらは私にとって身体的、精神的、社会的な問題ではあったもののヴェイユが語ったような「不幸」とは少し違うとも感じている。しかし人によっては非正規労働者になることや、うつ病になること、精神障害者となることによってヴェイユが「不幸」と呼ぶ状況に陥ることも当然ある。「不幸」と全ての悲しみと何が違うのか、それは「社会的な因子」以外にも特徴がある。

> キリスト自身が誰かの目を通してそれを見るのでなければ、だれが不幸な人々を識別できよう。ただ彼らがときどき変な素振りをすることがあって、人はそういう素振りを非難している。
>
> 自分が不幸で傷ついている人たちは、誰にも助けを与えるような状態ではないし、助けを与えようと欲することもほとんどできない。だから不幸な人に同情することは不可能なことだ。
>
> キリストは不幸な人だった。キリストは殉教者として死んだのではない。キリストは一般の法律上の罪人として、盗賊に混じって、ただもう少しこっけいなものとして死んだ。不幸はこっけいなものだから。
>
> （同上引用）

不幸な状態とは、現存している社会の文脈でわかりやすく同情の対象になるものではない。現代社会の文脈で言えば、不幸な理由は「自己責任」として全部個人に押し付けられる。その理不尽に対抗できないほど心身が消耗していたり、あるいはその不幸の状態を意

識さえできず、自己嫌悪の中で生きる人の振る舞いが「同情」さえされない状態であることに私は注目してきた。それはわたし自身の「不幸」の経験だけでなく、情けないことにその後社会運動の中で出会う幾人かに対し、「同情できない」という自分の中の冷たさをも見出す時でもあった。

「家族環境が整っていない」「社会的制度の網からこぼれ落ちている」「社会的な差別を受けている」という言葉だけで説明がつかないほどに、あるいはそれらの状態が複数重なっていることによって、努力や勤勉などといった近代的な物語に適応できる姿勢を身につけたくないのか身につけられないのか判然としない（本人もわからない）状態。ヴェイユの言葉を借りるならば

> 不幸のもう一つの結果は魂の中に無気力という毒を注入して、少しずつ魂を不幸の共謀者にすることだ。だれでも十分に長く不幸だった人には、自分の不幸との一種の共謀関係がある。この共謀関係はその人が自分の運命を改善しようとする全ての努力につきまとう。それはその人が不幸から解放される手段を妨げ、時には解放を願うことまで妨げる。
>
> （同上引用）

という状態。「不幸」とは社会的問題の要素が鍵であるにもかかわらず、既存の社会的問題の枠組みなどでは説明がつかず、しかも他人からは同情されず嘲笑の対象になるということだ。しかも新自由主義と呼ばれる今の時代には「不幸」を無視するには便利な「自己責任」が発明されている。国家や企業に責任を問う前に個人に責任を帰する、強者言葉であるが、この言葉によってヴェイユの語るような「不幸」は増えこそすれ、減少の兆しはないと私は考える。

2021 年 8 月「メンタリスト」を名乗る人物が下記のように YouTube 動画で発言をした。

> 生活保護の人たちに食わせる金があるんだったら、あの、猫を救ってほしいと僕は思うんで。生活保護の人生きてても僕べつに得しないけどさ、あの、猫はさ、生きてれば僕得なんで。猫が道端で伸びてたらかわいいもんだけど、ホームレスのおっさんがさ、伸びてるとさ、なんでこいつ我が物顔で段ボール引いて寝てんだろうなって思うもんね。うん。

上記の発言は SNS 等で「炎上」し、多くの批判が殺到した。ホームレス支援等の社会運動団体も抗議の声明を出し、この「メンタリスト」は謝罪をしたもののむしろその謝罪の内容こそが問題だと思った。というのもこの人物は「生活保護を受けながら頑張っている人がいる」という理由のもとで謝罪をしたからだ。

困難の原因を説明しにくい場合、さらに傍目から見たらその不幸は自分が招いたのだ、

と思われるような人（それこそがまた不幸の特徴なのだが）こそが、切り捨てられる。私自身は即座に社会的な問題だと判断しやすい状態よりも（とはいえそのような場合もこの日本社会の中できちんと制度的な対応がなされているわけではないが）、「自分の責任」とみなされがちな状態にこそ、社会的な問題の根があると考えてきた。

次章ではその根を掘ることで、人々や社会を動かす「言葉」とは何かを語りたい。なぜならその状態に向きあわなければ、言葉にならない感情は（自分に向かうかあるいは他人に向かうかの違いは大きいとしても）時として「暴力」になるからだ。

第一章【注】

（注 1）キルケゴール『死に至る病』序言のもじり。大元の言葉は「この論述は、あまりにも厳密なので教化的なものというわけではなさそうだが、かといって厳密に学問的であるにはあまりにも教化的すぎる」である。

（注 2）以下『神への愛と不幸』についてはシモーヌ・ヴェイユ著作集 4 橋本一明・渡辺一民訳 『神を待ちのぞむ』所収（1967 年, 春秋社）を参照。

第二章　言葉にならない呻き、あるいは祈り

> 私たちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せない呻（うめ）きを持って執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は神の御心に従って、聖なるものたちのために執り成してくださるからです。
>
> （ローマの信徒への手紙 8．26-27）

そもそも私の言葉の出発点は「考える」ことや「書くこと」の前に、まさに上記のような「呻き」から始まったといってもいい。でもこれは心身ギリギリの地点に立っていることであり、場合によっては暴力になってしまう。「呻き」が暴力に向かわず、違う何かに向かわせる手立てが必要だ。それが私にとっては「祈り」、いわば信仰の次元の言葉が必要であった。「不幸のもう一つの結果は魂の中に無気力という毒を注入して、少しずつ魂を不幸の共謀者にする」というヴェイユの言葉をさきほど紹介したが、その過程には「無感覚」「無感情」という状態が伴うことも多い。ヴェイユ自身工場労働経験によって「自尊心とか、自重の思いとかの拠りどころになっていたあらゆる外的な理由（以前、私はそれらを内的だと思っていた）が、二、三週間で、毎日の生活の残忍な圧迫のもとでたちまち徹底的にくずされ」その結果、「あきらめきった駄獣のように温順でありたかった。わたしは、待ち、ほどこしを受け、命令を実行するために生まれてきたような気がしていた」（注 1）と語る。

ヴェイユ自身はその経験をもとに、「不幸」というシンプルな言葉でその状況を言語化していく。ヴェイユにおいては言葉を失うというよりも、よりシンプルな言葉「不幸」「神の愛」といった言葉で思考していくようになったとも思える。そしてそのシンプルな言葉を深く掘っていくあり方こそ、わたしが現在の労働/生存の問題の足掛かりとしているところでもある。

さて、その無気力さや温順さは一歩間違えれば、目上のものにこそ温順であっても、自分より弱いもの、劣ったものに対しては「めんどりたちは傷ついためんどりにとびかかって、つつこうとする」(『神への愛と不幸』) ことにもつながりかねない。

言葉にならず感情と身体が直接に繋がることでの暴力は否定しつつも、言葉にならないこと自体は認めた上で、一歩違う動きにつながるものが「呻き」だ。そして「呻き」こそ「祈り」の原風景だと言いたい。呻きは文字通り「うう」としか言葉にならないわけだが、その後には「痛い」とか「辛い」とか「苦しい」というシンプルな言葉が続くだろう。私自身はヴェイユが「不幸」であるとか「愛」というシンプルな言葉を使いながら思索を深めるあり方を、祈りは呻きであるという視点（そしてわたし自身がしばしば重要視する視点）に近いと考える。シンプルであることと地続きに重要なのは少なくとも「神」に対しては「嘘をつかない」ことである。

これは巷でいうところの「ありのままの自分を受け止める」とか「自己肯定」という言葉に回収されがちだ。しかし、わたしは自分自身の力だけで、「ありのままを受け止める」だとか「肯定」するということがそもそも可能なのかは疑問である。「承認欲求」という言葉があるが、この「欲求」そのものが悪いというより、誰に何を承認されるかが重要な問題だろう。自己肯定という言葉が人々に目新しく映ったとすれば、大抵承認されたい相手は漠然とした「世間」であったり身近な誰かであったりするケースが多かったからこそ、「自分で自分を肯定する」という言葉が目新しく映ったのだ。しかし自分の思いを自分だけで肯定、承認するのは無理がある。とりわけ社会的に「悪」や「弱さ」とみなされているものを、この社会の価値観の中で育成された自分が受け止めることは厳しい。だからこそ「国家」「資本」等の権威と対抗した何かがあることを「信じ」、そこにこそ受け止めてもらいうることを「信じる」ことが重要となる。それをユダヤーキリスト教世界では「神」と呼んでいたのだろうか。しかしそれが社会的な権威とは違うものであるとすれば何ゆえなのか。

それは（社会には取り繕うような生き方の便法があったとしても）「神」に取り繕わない、「嘘をつかない」というあり方ゆえではないだろうか。逆に神に嘘をつくとは何が起きることなのか。

ヘブル語聖書（注 2）の「創世記」ではアダムとエバが神からは食べるなと禁じられていた「善悪を知る実」を食べた後、「裸であることを知り」「怖くなり身を隠した」。社会ではともかく神に対しては裸（ありのまま）でも怖くはないはずだ、という発想が伺える。私たちは神に助けを祈る前に自分で（社会的価値観入りで）善悪を考えて自己決定するこ

とが「普通」とされる。しかし祈ることは善悪を自分で考える前に「嘘をつかない」ことが重視される。今は祈ることを軸に話しているが、善悪の判断をする前に「嘘をつかない」ことの重要性は、歴史改竄の問題などにも通じるはずだ。つまり「祈り」の「嘘をつかない」という姿勢はそのまま過去の罪や悪事の「証言」にもつながる。あるいは「嘘をつかない」という姿勢は、そのものによっていわゆる国家や資本が決めていた「社会的規範」から距離を置くものともなりうる。

この「社会的規範から距離を置く態度」こそ、私においては「フェミニズム」につながるものだ。というのも「社会的規範」とその規範が生み出す女にまつわる「嘘」を見抜くものにつながるからだ。

> 女の名誉は、まったくべつのものだった。処女性、純潔、夫への貞節。女の正直さは重要とみなされてこなかった。

> 嘘のことを語れば、真実という主題にどうしても行き着く。（略）真実は一つのモノではないし、一つの体系ですらない。それはややこしさの増していく複雑な何かだ。（注 3）

> 私たちの若き姉妹よ、まずかく疑うことを習え。かく疑うことを知った時、そしてこの疑いをあくまで熱心に、あくまで執拗に追求することを学んだ時、そこには私たち夫人の救いの道がひらけてくることを、ただそこにのみに開けてくることを覚(さと)らるるであろう。（注 4）

では「嘘をつかないこと」そして「嘘を疑う」ことがいかに「フェミニズム」と結びつき、そこからいかなる「行動」が生み出されていくのだろうか。

第二章【注】

（注 1）シモーヌ・ヴェイユ著 黒木義典・田辺保訳『労働と人生についての省察』（1967 年, 勁草書房）

（注 2）『旧約聖書』と呼ぶのは、キリスト教中心のバイアスがかかるということで、ヘブル語聖書という呼び方をする習慣が生まれている。今後「旧約聖書」とキリスト者間で呼ばれてきた聖書についてはこのように呼ぶこととする。

（注 3）アドリエンヌ・リッチ著 大島かおり訳『嘘・秘密・沈黙』（1989, 晶文社）

（注 4）山川菊栄集 評論篇 第一巻『女の立場から』2011 年新装版 岩波書店。もとは『新日本』1918 年 11 月号の時評『女の立場から』（婦人評論）に掲載。女子教育について男性だけで決めることに異議を申し立てた内容である。

第三章　社会を動かす「組織」あるいはそれとは別の仕方で

さて、実際に社会を動かすときに決して無視できないことは「組織（すること）」あるいは「集団性」の問題と言えよう（注 1）。ちなみにヴェイユは「集団」に対してファシズムという時代背景もあり非常に警戒を抱いていたが、そもそも社会を動かすという話だけならば労働組合などの組織を作る、あるいは関わりを持つ方が手っ取り早い。例えば、#BlackLivesMatter のハッシュタグについてアリシア・ガーザは以下のように語る。

> 一般市民がハッシュタグから運動を起こすにはどうしたらいいかと、ここ数年、何度も尋ねられた。こうした質問は大概真摯な気持ちから出たものだが、今でも聞かれるたびにうんざりした気持ちになる。（略）なぜか。それはハッシュタグから運動を起こすことはできないからだ。組織化（オーガナイジング）こそが運動を持続化させる。組織化から運動につながった経験を語れない人はオーガナイザーと呼べないし、おそらくその運動にはそもそも関与しなかったのだろうと思われる。（注 2）

しかしわたしが仕事を探し出した頃は「労働運動」についてほとんど知らず、労働組合にどう加入したらいいかも知らなかった。またそもそも派遣労働者の場合任期が来たら「雇い止め」（双方最初から承知）になるという契約に対してどう抵抗したらよいのかわからなかった。また「労働組合」や「労働運動団体」にどうアクセスしたらいいかもわからなかった。それゆえ一人でできることとしてメールマガジンを「書き」それを知り合いに見せる以外手立てが思いつかなかったのである。そこには「労働組合」などが当時の政策のもと解体された歴史的背景がある。新自由主義と呼ばれる時代の特徴「社会的連帯」の衰退の問題が存在していると言っても良いだろう。

社会運動のグループを知らないわたしはひたすら文章を書くしかできなかった（注 3）。その後文章が社会にでた後は、フェミニズム団体と関わることが生まれたが、1980 年代から問題提起されていた性別役割分業等の問題は変わっておらず、さらに新たな問題（非正規労働者数の増加）が生まれてきている中で、アカデミズムの言葉が現実を変えていかない問題について、奇妙なパフォーマンスで訴えるなどするしかなかった）（注 4）。しかしこの問題は単純にアカデミアと現場の乖離という問題のみならず、社会運動のただなかでも（あるいはかつて修道女として関わりたかったカトリック教会でも）セクハラ・パワハラ・いじめ・性暴力等が飛び交っているという事実が存在しているせいでもあった。しかもフェミニズムも決して他人事ではなかったのである。社会的連帯の衰退とは、外部からの抑圧による原因も大きいが、同時に内部からの崩壊も起きること（今も起こっている）と言える。組織化（organizing）あるいは連帯（solidarity）が重要と言われるが、「対話が重要」とか「歴史改竄は良くない」といっている人たちの中でさえも対話を無視することで力を発揮し、過去の運動の問題を省みることは少ない。組織や集団が（それは国家や

企業のみならず社会運動団体さえも）権力の言葉によってものを動かすツールに過ぎないとすれば、私たちはどのように「嘘をつかない」言葉で人や社会を動かしうるのかは、確かに混沌としてはいる。

その混沌を見据えたまま、神に「嘘をつかないこと」を旨としてフェミニズムや社会運動に関わるならば、起きたことを隠そうとする前に、起きたことをありのままに書き、自分だけの判断に委ねないことが重要なのではないか。しかし運動の内外問わず、セクハラ・パワハラ・いじめ・性暴力の問題が明らかにされることを最も関係者は恐れるものである。しかし、内側のハラスメントや性暴力を隠したままで、社会運動を進めることは、まさに信頼の破壊につながり、人の命の破壊にさえつながりかねない。「信仰」とは、まさに善悪を自分一人で判断するより嘘をつかないことを重視する営為ではないか。また、なんのためにそもそも嘘をつこうとするのか、と問う時にこそ「社会的規範」への疑いの姿勢が生まれうる。しかしそのような嘘をつかず、常に祈りにおいて確かめながら進めるやり方は、非常にペースが遅くなり効率に欠けるように見えるかもしれない。しかし着実な変化を望むには、重要な時に「嘘をつかない」ことを学ぶ必要がある。それは「神と富」が目の前にあれば「神に仕える」ことに向かう姿勢に近いものかもしれない。

第三章【注】

（注 1）組織、集団と言っても英語でも organization, collective, community と様々ある。Organization は語源は臓器（organ）と共通しており、また collective は語源的には「集まる」、community「共に交換する」という意味合いがある。

（注 2）アリシア・ガーザ著 人権学習コレクティブ監修・翻訳『世界を動かす変革の力 ブラック・ライブズ・マター 共同代表からのメッセージ』(2021 年, 明石書店)。

（注 3）自分で作ったメルマガや、ボランティア先の横浜・寿町での通信誌などに書き、その後有限責任事業組合フリーターズフリー（当時）編集・発行の『フリーターズフリー』（2007 年）の作成に至る。

（注 4）拙著『ぼそぼそ声のフェミニズム』（2019 年, 作品社）p.111 参照。

おわりに

> 「キリスト教の『肉化』(incarnation)』ということは、個人と集団との関係の問題の調和ある解決を意味しています。（略）この解決はまさに今日の人々が渇望するものなのです。」
>
> （シモーヌ・ヴェイユ　『別れの手紙　霊的自叙伝』）（注 1）

おそらくある人の「不幸」をその人固有のものであると十分認識した上で、しかも社会的

な因子をも同時に見出すということは、集団的なものの中に、個々の存在を十全に認めることの困難と似ている。しかし私たちは、ともすると貧困な人、病気の人、生きづらい人・・・etc に対して、まさにその名前のもとで「レッテルを貼った社会の階級の一例」（注 2）としてのみ認識するか、あるいは取るにたらない個人として切り捨てることが多い。匿名の「よくわからない」相手に「どうしましたか」と尋ねること「あなたの苦しみはどんなですか」（注 3）とシンプルに尋ねることは確かに権力的な言葉によらずに何かを動かす気配を感じる。これだけ膨大に書き散らしながら、最後にその「気配」だけを書き残すことだけで、この論考の読者に対して申し訳なさがある。しかしこの気配に対して敏感になることで、不幸の呻きが、自分個人のみに閉じこもらない呻きに接続されるのではないか。それこそ「この人は生きづらい系だ」というレッテルが存在し、そのレッテルを貼られる人間もまた存在しているただなかで。

おわりに【注】

（注 1）シモーヌ・ヴェイユ著作集 4 橋本一明・渡辺一民訳 『神を待ちのぞむ』所収,（1967 年, 春秋社）

（注 2）『神への愛のために学校の勉強を活用することについての考察』シモーヌ・ヴェイユ著作集 4 橋本一明・渡辺一民訳 『神を待ちのぞむ』所収, （1967 年, 春秋社）

（注 3）同上

【この論考は 2021 年 2 月 10 日に行われた臨床哲学フォーラムの内容をもとに加筆修正を加えたものである】

（くりた・りゅうこ）